

兵庫県のツツハムシ (2)

(兵 庫 県 甲 虫 相 資 料 ・ 2 0 5)

高 橋 寿 郎

“兵庫県のツツハムシ”と題して“Parnassius” (No.32:3-11,1987)誌上に拙文を発表して頂いたが投稿から発表までに若干時間がかかった関係から訂正しなくてはならない点追加すべき新知見もあつたりするので此処に第2報として発表させて頂き度いと思う。

○学名の変更

10. *Cryptocephalus exiguus* Schneider

モモグロチビツツハムシ

前回*Cryptocephalus kiyosatonus* Kimoto モモグロチビツツハムシとしたがその後木元新作博士はヨーロッパ原産の*C. exiguus* Schneider (Neuest. Magaz., 1(2):189)のシノニムとされた (Ent. Rev. Japan, Vol. 41, No. 2, p. 125, 1986)。従って学名は上記の様になる (番号は前回の報文のもの、以下同じ)。

14. *Cryptocephalus parvulus* Muller

セスジツツハムシ

前回*Cryptocephalus obliquostriatus* Motschulsky セスジツツハムシとしたが木元新作博士はヨーロッパからMüllerにより記載された*Cryptocephalus parvulus* のシノニムであるとされているので (Ent. Pap. pres. Kurosawa, Tokyo, pp. 310-311, 1986) この学名に変更させて頂く (尚ハギツツハムシの属名が変わるがハギツツハムシの項の所で説明させて頂く)。

○産地の追加記録その他

全般にわたり兵庫県下の産地の追加はあるが特に注意すべき種に就いて此処に追加記録しておく。

1. *Adiscus lewisi* (Baly)

タマツツハムシ

前回県下での産地を紹介しておいたがこの種は播磨平野各地にもごく普通に見られる種で前回以後次の様な所で採集出来ているし、特に小野市山田町の池畔でのコナラ葉上では多いとの印象を受けた。

追加産地：神戸市木津（1♀，27-VII-1984），逢山峡（1♀，1-VII-1986，2♂，2♀，7-VII-1987）。三木市細川中（1♀，11-VII-1985，1♀，26-VII-1985），吉川町（2♂，4♀，14-VII-1986，10♂，7♀，3-VII-1986），笹原（1♀，26-IX-1986）。美濃郡吉川（1♀，11-VII-1985，1♀，27-VII-1985，1♂，2-VIII-1985）。小野市山田（4♂，5♀，8-VII-1987，2♂，1♀，8-VII-1987）。加東郡東条町森（5♂，1♀，4-VII-1984），社町三草（1♂，17-VI-1987，2♂，3♀，24-VI-1987）。

2. *Coenobius piceus* Baly

クロヒメツツハムシ

その後標高の低い所、いわゆる播磨平野と称される地域で採集出来ている。かなり広く分布している種のようなのである。

追加産地：三木市細川中（1 ex., 11-VII-1985）、口吉川町（2 exs., 4-IX-1986）。美濃郡吉川（1 ex., 13-IX-1985）。加東郡東条町森（1 ex., 20-VII-1984）。

4. *Cryptocephalus amicus* Baly

キアシチビツツハムシ

兵庫県下からの記録は扇の山の記録を知っていただけであったが1987年6月27日と7月7日にそれぞれex.神戸市の逢山峡（標高400mの地点）で採集することが出来た。

8. *Cryptocephalus fulvus* Goeze

ウスグロスジツツハムシ

本種はGoezeによりヨーロッパ産で記載された種である(Ent. Beytr. 1:321, 1777)。

1874年のGeminger et HaroldのCatatogue Coleopterorum Tome X I. Chrysomelidae (Part. I)によると(p. 3326)多くのシノニムが掲げられている。有名なE. ReitterのFauna Germanica IV Band, 1912には原色で図説されている(p. 101, pl. 143, f. 24)。また1913年のH. ClavareauによるW. Junk Coleop. Cat. Pars. 53, p. 151ではヨーロッパ、西シベリアが分布地とされている。

中国からの本種が記録されたのはChenによるものが初めてである(Sinensia, 13(1-6):121, 1942, N. China

)。

Gressitt及び木元新作両博士の“The Chrysomelidae of China and Korea” (Pacific Insect Monograph 1A:151, 1961)の中では本種の分布はヨーロッパ、シベリア、北支那とされている。そしてこの中で中條道夫博士が朝鮮半島Kankyo-Nandoから図を入れて新種記載されたウスクロスジツツハムシ *C. fuscolineatus* Chujo (Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa, Vol. 30, No. 205, p. 385-389, f. 5, 1940)が本種のシノニムと処理された。

中條道夫博士はその後このウスクロスジツツハムシを Korea: Hill Gozanからも記録しておられる (I. C., Vol. 31, No. 219, p. 456, 1941)。

さらに新潟県 (Kinoto-Seashore) から日本初記録として報告された (長岡市立科学博物館々報, p. 5, 1956)。この種がウスグロスジツツハムシのシノニムになるのであるが本種の日本からの初記録と言うのはこの中條博士のものになるわけである。

そして木元博士は1964年 “The Chrysomelidae of Japan and the Ryuku Islands, III” (Joun. Fac. Agri. Kyushu Univ., Vol. 13, No. 1, p. 155) の中で和田義人博士が武庫川で採集された 7 exs. (7-VIII-1951) を記録された。

これが兵庫県で本種が記録された初めてのものでありその後全く県下での記録が見られない種である (日本での記録も充分文献を見ていないので良くわからないが余り記録の見られない種のように思われる)。

1984年木元博士は原色で図説された (原色日本甲虫図鑑 IV, pl. 31, f. 25, p. 162)。

かなりはっきりした色彩をしているハムシでそれ程同定に苦しむ様な種ではないと考える。1986年三木市口吉川町で 1 ex. を叩網にて採集することが出来た。県下からは 2 番目の記録になると思われる。

食草・生態などは筆者の見た範囲の文献からはよくわからなかった。ともあれ県下では極めて珍しいハムシなので今後の調査をつづけなければいけない種の 1 つである (前報文で著者校正が無かった関係からミスプリントが多く申しわけなく思います。Goezu → Goeze。木本博士 → 木元博士。細田義人博士 → 和田義人博士)。

15. *Cryptocephalus perelegans* Baly

キボシツツハムシ

最近中根猛彦博士は本州産の本種の斑紋は割合安定しているようだがトカラあたりにゆくと可成り変化が著しいことを報告しておられる (北九州の昆虫、第 3 2 巻、第 1 号、p. 1-2, 1985)。(他に琉球諸島におけるキボシツツハムシ *Cryptocephalus perelegans* Baly の色彩・斑紋変異について木元

博士による図入りの解説論文もある。Kontyu Vol.42, No.3, pp.270-282, 1974)。確かに神戸市内産あたりでは斑紋の変化はそれ程目立たない。依然神戸市内にごく普通に見られるのに県下で他の地域にて採集出来ていないハムシの1つである。

19. *Pachybrachis eruditus* (Baly)

ハギツツハムシ

本種は従来*Pachybrachus Redtenbacher* 属に扱われていたが木元新作博士は*Pachybrachis Chevrolat* 属に変更しておられる(Ent. Pap. pres. Kurosawa, Tokyo, p.311, 1986)。従って上記のようになる。

前報文で(和名は木元博士、1984による)県下での個体数はそう多くないむね記録しておいたが1987年7月7日神戸市北区逢山峡(標高400m位の地点)道端のハギに多くいるのが見られた。葉を食害している様子は見られなかったが葉の上にとまっているのが多かった。手で採集出来る状況であった(一応7日12exs.採集)。その後7月11日再度見に行った時もほぼ同じ状況で28exs.採集出来た。この日は交尾中のものも見られた。このハギには特にハギルリオトシブミが多く来ているしその他ホシハラビロヘリカメムシ、セマダラコガネ、ハギルリツツハムシ、ヨツボシナガツツハムシ等々も来ていたり、1ex.であるがキアシルリツツハムシも来ていた。けっこうこの時期ハギには色々の虫がやって来ているようである。さらに7月28日ハギの一部に花が咲き始めていたようだが依然本種は多かった。29exs.採集。

斑紋の変化もある様で既に中條道夫博士が詳記されているし(図説食葉はむし類、p.73-80, 1956)、木元博士も記しておられる(1984)。全体が黒いと言うのは見られなかったが上翅全面に黒い点刻が少なく全体が黄褐色に見えるものと変化がある斑紋をしていることは事実である。時期さえうまくめぐり会えば非常に個体数の多い種であることがわかった。

(OCT.1987)